

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第678号 平成26年1月27日

歴史の教訓（2）

第1次世界大戦が始まって今年で100年が経過するわけですが、この間を振り返ると、これ迄の100年間は戦争の100年間であったといわざるを得ません。

第1次世界大戦終了後も、僅か20年余りで第2次世界大戦が勃発しています。第1次世界大戦の反省に立って、2度と同じ悲劇を繰り返さない様国際連盟が作られたにもかかわらず、第1次世界大戦を遙かに超える被害を人類にもたらしました。

第2次世界大戦終結後は、国際連合という強力な国際機関が作られましたが、東西冷戦下の中、朝鮮戦争やベトナム戦争が起こっています。更に今世紀に入ると、早々にイラク戦争が始まりました。その戦争は既に終結していますが、その爪痕は、今も大きく残っています。

地球上の様々な地域では、銃声の音が止む事なく続いています。しかも、国際社会は、テロという新たな形の戦争の脅威に常に晒されています。

20世紀は戦争の世紀といわれて来ましたが、結局、21世紀に入っても、現実は何も変わっておりません。

こうした中、東シナ海や南シナ海は、経済的にも軍事的にも膨張し続ける中国のパワーによって緊張の海に変わりつつあります。中国は覇権を求めないといいながら、実際の行動を見ていると、日本を初め東南アジア各国との間で意図的に緊張を高めている様に見えます。

一方、世界の警察官を自認していたアメリカに昔日の面影はなく、中国をどこ迄抑え込めるかも疑問です。

勿論、今の中国に、日米を相手に戦争を仕掛けようという意図があるとは考えられません。しかし、尖閣諸島や南沙諸島を巡って、中国と日本はじめ関係国との間で、例え偶発的であったとしても局地的な武力衝突が起こる可能性を否定する事は出来ないと思います。

私達は、些細な小競り合いや小規模の武力衝突であっても、それが第1次世界大戦の時の様に、誰も望まず、考えてもいなかった世界戦争に結び付く危険性を忘れてはなりません。その意味でも、中国はじめ日米等関係各国は、過去の戦争の歴史から学ぶべき事は多い筈です。取り分け日本は、中国以上に過去から学ぶべきではないかと思っています。（塾頭：吉田 洋一）